



成果報告書

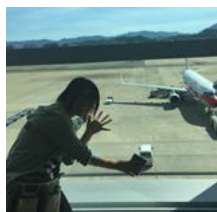
浙江科技学院(中国)プログラム

参加者プロフィール



丹澤 小雪（団長）
芸術地域デザイン学部
芸術表現コース 1年

英語を使ったコミュニケーションの機会を作ろうと思い参加。加え、中国美術にも興味があり、その鑑賞も旅の目的の一つ。



高森 渚
芸術地域デザイン学部
地域デザインコース 1年

一度海外に出てみたいと思い、知っていそうで実は知らないお隣さん、中国に飛ぶことを決意。



佐藤 和高（副団長）
教育学部学校教育課程
中等教育主免専攻 2年

成長スピードが半端ない中国をこの目で見たいという強い気持ちから参加を決意。



寺川 昂希
理工学部
機械システム工学科 1年

一度海外に出てみたい、自分の英語力でどれほど通用するのか確かめたい、という気持ちから留学を決意。



吉富 葵
経済学部
経済学科 1年

海外に行くことに興味を持っていて、外国の人や文化に触れたいという気持ちから参加を決めた。中国がどんな国なのか一番関心があったので自分が思う事を肌で感じたいと思ったため。



吉浦 亜美
農学部
応用生物科学科 2年

異国の地に足を踏み入れてみたい。また、1年間勉強した中国語を実際に現地で使ってみてみたいと思ったため。



岩本 佳央理
芸術地域デザイン学部
芸術表現コース 1年

中国の伝統芸術を学び自分の作品に影響するようないい刺激や感性を吸収したい、日本とは違う外国生活の中で自分の体験によって新たな知識や視点を身に付けたいと思い今回の留学に参加を決意。



高田 遥香
芸術地域デザイン学部
地域デザインコース 1年

まだ行ったことのない中国に行って様々な体験をして刺激を受けたい、自分を成長させたいという気持ちから参加を決意。



上角 佳代
芸術地域デザイン学部
地域デザインコース 1年

英会話力と英語でのコミュニケーション力の向上を目的として本プログラムに参加をした。



砥板 文登
経済学部
経営学科 3年

中国で言葉や文化を学びたいと思ったため参加を決意。

プログラム概要

【期間】

2018 年 8 月 13 日～8 月 26 日(14 日間)

【留学先】

浙江科技学院 杭州市西湖区留和路 318 号

【内容】

二人の中国人バディと十人のドイツ人留学生と共に二週間中国で生活し、中国語のネイティブな発音などを学んでいく。また、有名な観光地や博物館を訪れるなどして歴史や文化を学んだ。

浙江科技学院について

浙江科技学院は浙江省杭州市にある理工系総合大学である。

1980 年に創設された浙江大学附属杭州工業専科学校を前身とし、2001 年に浙江科技学院と改称された。工科を主体とし理学、文学、経済学、管理学、教育学などの学類も網羅する総合大学である。杭州市内に 3 つのキャンパスを持ち、総敷地面積は 98 万平米である。11 学部 43 学科があり、学生数は 14,000 人である。

授業

授業は、月曜日から土曜日の週6日、9:00～11:35 の約2時間半行われていた。クラス編成は 1 クラスで 10 名の日本人留学生と 10 名のドイツ人留学生の計 20 名で行われていた。ドイツ人留学生を含め、中国語を学んでいた者と初めて学ぶ者がいたが、特にクラス分けはなかった。

授業では主に発音を習い、ピンインのみで進められた。漢字を教えてもらえなかった理由は、時間が足りないからということであった。文法よりも単語を多く習い、何度も発音の練習をした。授業は先生がスライドを進めていくという形式で、教科書は使用しなかった。発音の練習の仕方や授業の進め方は佐賀大学の基本教養科目で学べる中国の言語と文化の授業とほとんど同じで驚いた。日本での授業と違っていたことは、夏休み期間のためか先生が子供を連れて授業をしていたことと、分からないことがあったらドイツ人がすぐに質問をするということだった。

授業は全て英語で行われたが、難しい単語はなく、すんなりと受け止めることができた。

2 週間という短い期間ではあったが、先生方のご指導の下、バディなしでも買い物ができる程度に語学力が上がった。これからも自分で勉強するなり長期の留学に行くなりして語学力を高め、自分の将来に役立てて行きたい。

	SUN 8.13	TUE 8.14	WED 8.15	THUR 8.16	FRI 8.17	SAT 8.18	SUN 8.19
Morning		9:00-11:00 Introduction to Hangzhou & Zhejiang		9:00-11:00 Chinese Language	9:00-11:00 Chinese Language	9:00-11:00 Chinese Language	
Lunch	Free	12:00-1:00	Visit Hangzhou City West Lake (scenic spot)	12:00-1:00	12:00-1:00	12:00-1:00	
Afternoon		1:30-4:30 Campus Tour, 500 cards, mail cards		2:00-4:00 Chinese Kungfu (Tai practice)	2:00-4:00 Chinese Kungfu (Tai practice)	2:00-4:00 Chinese Paper Cut	Free
Evening	Free	6:00-8:00 Welcome Dinner		Free	7:30-9:00 Pottery Making	Free	
Morning	9:00-11:30 Chinese Language	9:00-11:30 Chinese Language	9:00-11:30 Chinese Language	9:00-11:30 Chinese Language Test		8:30-10:00	8:30
Afternoon	2:00-4:00 Chinese Paper-cutting Practice	1:30-4:30 Visit to Song Dynasty Town	2:00-4:00 Chinese Calligraphy	Free	One-day Visit to Ningbo and Fuzhou	One-day Visit to Shanghai	Free time and Departure
Evening	Free	Watch a wonderful performance in Song Dynasty Town	Free				

↑ 研修日程表

バディとの交流

今回のプログラムでは、主に中国の言語と文化について学んだ。月曜日から土曜日までの午前中は主に中国語の授業があり、午後は太極拳や切り絵などの伝統文化の体験や、自由時間などがあった。自由時間にはドイツ人と買い物や散策活動などをした。休日にはバスを使って遠出をする者もいた。日本人同士だけではなく、中国人バディやドイツ人留学生と食事をし、交流を深める者も多かった。

文化講座

文化講座についてはカンフー、陶芸、切り絵、ファンペインティング、習字の 5 つを体験した。

カンフーについては専門の講師の方による指導が行われた。まず初めには体ならしとして互いの膝をぶつけ合うというミニゲームのようなことをした。ある程度体も動くようになったところでカンフーに入る。まずは講師の方がカンフーとはこのようなものだとか教えるために実際にやってみせてくれた。講師の方が教えてくれたカンフーは 2 種類。ゆっくりとした動作で行うものと静と動がはっきりとした動作で行うものだ。陶芸については自分の手で形を作っていくもの、とろくろという機械を使用して作っていくものの 2 パターンを行った。

切り絵については、いくつかの切り絵の型紙から自分の切ってみたい型を選び、ハサミもしくはカッターを使用して切っていくという体験を行った。切り絵の型はどれも細かいものが多く、授業時間内に切り終わらない人が多々いた。

ファンペインティングについては円形の扇に日本絵の具のようなものを使用して描いていくということを行った。

習字については日本と同じようなものであり、とめ、はね、はらい等の書き方について学んだ。

現地中国人との交流

宿泊した寮に近い中華料理屋の店員との交流について述べていく。その店員さんは、日本語は通じないのはもちろんのこと英語もそれほど通じなかったが、翻訳アプリを駆使して交流を行った。その人はとある日本の芸人に似ていたので、私たちはその人を中岡とよんで親しんだ。彼は日本のアニメが好きだそうで、日本出身の私たちにとてもよくしてくれた。お互いの言葉が理解できないという状況にありながら、こんなにも人は親しくなれるのかと驚いた。このように、人によって英語が通じる、通じないがあることが判明し、英語の利便性とボディランゲージとコミュニケーション能力の重要性を知った。

↓ 中華料理店と中岡(仮)



寮生活

寮については部屋が4つに別れており、ひとつの部屋に1、2人泊まることが可能な構造であった。部屋によって設備やデザインが異なっており、例えばある部屋には冷蔵庫があるがある部屋にはなかった。また、数回だが部屋にハチやヤスデ等の虫が侵入していた。トイレとシャワー室は一つになっていて、トイレにトイレトペーパーを流すことができなかった。

これは中国ではごく当たり前のことである。すぐ隣が森であり網戸がないことから虫は多いものの、寮はとても快適でリラックスできる空間であった。しかし私は寮にいるときが一番日本を恋しく思う時間でもあった。

中国での生活

1、交通手段

交通手段については主に徒歩、バス、タクシーの3つ。バスについては2元または3元を先に支払い、降りたい所で降りるというシステムであり、行先の距離によって料金に変化する日本人との違いを実感した。

2、物価

日本円に換算すると1元は約16円と安く感じるが、その土地の物価に慣れて行くに従って価値観を理解できるようになった。以下、生活圏内の物価をまとめる。

飲料水	2.8元
お茶	6元
バス	3元
筆記用具	2元
生理用品	10元
玉子炒飯	8元
麺類	13元
トイレトペーパー	3元

3、食事

食事についてはもちろん中華料理が大半だった。大きな回転式の丸テーブルに多くの料理が置かれ、みんなで食べるという多くの人々がイメージするような店が多かったように思う。量は店によって異なるが基本的にはみんなで完食できないくらいの量はあった。辛さについては辛いもの好きな人にとってはとても美味しく感じた。個人的に思ったのは、主にジュースはSpriteとコーラの2種が飲まれており、日本と比較して種類の少なさを実感した。中国では水ではなくお湯が出されるという点についても文化の違いを感じた。また、中国では割り箸があまり使われておらず、しかも先端と持ち手が同じ太さのただの細長い棒のような箸が多く、日本人からしたらとても食べにくかったことが印象的であった。

まとめ

私たちは今回の短期留学を通して、中国語はもちろん、日本との様々な違いや中国社会の実態を発見することができた。この経験はこれからの語学力上達や就職活動に活かせるだけでなく、各々の人生をきっと豊かにしていくことだろう。ここに留学しての感想をまとめようとすればまた膨大な字数になると思われるので、そこはぜひ参加者の体験談を読んでほしい。この成果報告書が誰かの参考になれば幸いである。

「人とは」

芸術地域デザイン学部芸術表現コース

1年 丹澤小雪

浙江科技学院プログラムに参加し、短期間ではあるものの、中国での生活をした。初めて渡航する土地で二週間、プログラム開始時の私は、いろいろな感情にあったことを覚えている。緊張や焦り、多少の期待はあったものの、それを凌ぐ不安。勉強不足の後悔とは、このようなときに痛感する。プログラムが終わったいまでも、未だに感じていることではあるが。

中国とは、どんな街なのか。人伝にしか聞いたことのない国に、様々な想像を巡らせていた。中国は今、発展途上にあり、国全体で様々な改新が進められている。雑多な情報が錯乱し、日本では考えられないほど繚乱としていたのは想像通り。加えて人のあり方も日本とは大きく違った。もっとも顕著だと感じたのは、店員などの接客業という立場に身を置く人間の振る舞い方であろうか。日本では、お客様には失礼のないようにという考え方で運営されるのが基本であるが、この国では全く違っていた。いい意味で割り切った、売買を双方の利益のためだけに用いる、ただの等価交換であると考えている、といった印象を受けた。例えば、客に見える位置でスマホを触る、ご飯を食べる、寝る、どれも日本では考えられない、あまつさえ客側もそれを容認している、というか何も気にしていない様子で接客を受けており、大きな衝撃を受け同時に、日本の過干渉さにも驚愕した。

そんな、驚き驚きの毎日の中で、一つ、ふと気づいたことがある。少し意味がわからないかもしれないが、『人は人である』ということ。人はどこに住んでいても、どんな生活をしていても、自分と同じ、人なのだ。中国では、日本と同様に英語が通じないことが多々ある。しかしお互い理解し合えない中でも、私はいきたいところに行けたし、飲みたいジュースを飲めた。もちろん、語学勉強を蔑ろにできる、などという意味ではない、むしろ必要性はこれまでで一番感じた。ただ、相手が外国人であるということだけで萎縮してしまうこと、言葉が通じないというだけでコミュニケーションを取るのを諦めてしまうこと、そんなことで新しい人と関わる機会を棒に振っていたのかと、半ば絶望とも言える感覚に、プ

ログラムの折り返し地点で陥ったのだ。もうそんなことはないし、何も臆することなく意思の伝達ができるといえば、大ウソになるし、今でもそんな自分もいる。生来の人見知りと臆病な性格が相まって、一緒に参加していたドイツ人学生や、担当してくれた中国人学生に話しかけるのは、想像しているよりもずっと勇気のいる行為だった。いつも話しかけられるのをまっている受け身な姿勢であるというのも大いに自覚していたし、治したいといつでも切に願っていた。しかし、このことを感じて以来は、外国人と話すこと、話しかけることへの緊張が、少しばかり和らいだように思える。

とはいえ、この中国研修でやり残したこと、やりたかったことは数えきれない。最終日、そのことを考えていると、性格がとか元気がとか、言い訳ばかり出てきたことを思い出す。二週間という短い期間を暑さにかまけず、もっといろいろなことに使うべきだった、もう会えない人たちに、ちゃんとさよならを言いたかった、言い始めたらキリがない。できたことよりもできなかったことの方が多い、二度とこんな後悔はしたくない。

初めて行く中国、このプログラムに参加して、いろんな人に出会い、二週間の中で見つけた自分と向き合い、足りないものを考え、それを克服するのに何が必要か。じっくり考えた、残りの大学生活を送ろうと思える、大切な二週間を経験した。



杭州の河坊街での集合写真

「World」

教育学部学校教育課程中等教育主免専攻

2 年 佐藤和高

私は今回中国に足を運んだ。世界に目を向けるようになって 1 年くらいの素人だが、是非いつてみたかった場所が中国だった。理由は簡単で成長しているからである。私は成長について真剣に悩んだ時期があった。全く伸びない。どうすれば成長できるのかと。その時にちょうど中国が成長を遂げているというニュースを耳にした。その時からずっと心は中国にあった。中国を訪れて中国はなぜ成長しているのかを感じたかった。そして今回、そんな中国の成長の片鱗を見られたような気がする。中国と聞くとネガティブなイメージを持つ人が多いと思う。私もそうだった。中国製の商品だと不安になることもある。日本の製品をコピーしているだけだと感じることもある。それでも中国は成長している。明らかに目に見えるスピードで。その理由は、中国は成長しようとしているからである。成長するために必死だからだ。そんなものは街を一步步けば分かる。どこもかしこも工事中で変化しようとしているのが明らかに分かる。工事中の現状を隠そうともしない。このダメな状態を目に焼き付けておけよと、今に見てろよと言っているような雰囲気さえ感じられた。こんなにわかりやすく変化しているのは時の流れとここくらいだと思う。また、中国国内でキャッシュレス化が進んでいた。レストランでもバスでも誰もが当たり前のようにケータイをかざして音を鳴らしていた。これも最近始まったはずなのにこれだけ中国の中に溶け込んでいるなんて中国人はフレキシブルだなと思う。さらに中国人ポリスに聞いた話だが、信号を AI で管理して渋滞を緩和させているらしい。キャッシュレスと AI だなんて最先端のど真ん中を走っている感じか。こうしていいものは積極的に取り入れ、真似してそこから学びに変え成長につなげる。これを国家レベルでやれている中国は強いなと感じた。

日本に帰ってきてからもさらに中国のいろんな意味でのデカさに気付かされた。日本は全く変化しようとしていないというか、現状で満足しているように見える。未だに日本はすごいとみんな思っている。でもそんな状況は変わりつつあ

る。どこの国の人たちもさらに良くなろうと必死である。そのハングリー精神が日本にも私にも必要だと感じた。

最後に、この浙江科技学院プログラムに参加したからには特筆しなければならないことがあるように思う。それは全くと言っていいほど中国人との絡みはないということだ。私はチェンマイ大学プログラムに参加していたため、あたかも現地のバディがいて中国について の全てを持って帰れると思っていた。しかし現実には大きなドイツ人が立ちまわっていた。そのギャップがこの夏の 1 番のサプライズだった。この短期留学の詳細にドイツ人との交流と記載したほうがいい。てっきり中国人と友達になれると思っていた私はそのギャップにショックを受けた。ただ、やはり外国人は日本人と比べ、自分のしたいことをガンガンいうし、違和感を感じたら遠慮なく声に出す。それが一番の違いのだと思う。日本人は察するというか暗黙の了解とか阿吽の呼吸とか何も言わずに、というのが文化としてあると思う。でも外国にはない。だから、ふざけたことを言った後には、冗談だよとちゃんとやってくる。いや、そんなのわかってるよと。また、留学に来るとやはり頭がとても働いていて夜もすぐ寝れるし、常に何かを考えていて充実感がある。でも日本にいと緩やかな時間の中で緩やかに過ごして何も考えずに 1 日が終わって行く。でも心がけ次第でそんなものは変えられると思う。日本に帰ってからも留学中の充実感を感じるためには、学び続けること、新しいことにチャレンジし続けることがキーになって来ると思う。これらを意識して生活できれば、人生が豊かになると思う。結局は自分次第。敵は敵にあらずだ。これからも学び続けたい。



私を救ってくれた銀行員とその銀行

「谢谢、中国」

経済学部経済学科

1 年 吉富葵

私は本当にこのプログラムに参加してよかった。外国人との出会い、見たことない光景、異文化の体験が詰まった2週間だった。

まずは2人の中国人バディと17人のドイツ人留学生と過ごしてみて、私が初めに彼らに抱いていた印象が変わった。中国人はあまり喜怒哀楽がなくて積極的に話しかけてくれないと思っていたが、はっきりと表現して初対面でもたくさん話そうとしていた。ドイツ人は逆に喜怒哀楽が激しくて積極的に話しかけてくれると思っていた。喜怒哀楽はやはり中国人より激しかったが初対面ではあまり積極的に話しかけてはくれなかった。たしかに日本人が積極的でないからというものもあると思う。こういった面で、もし私が参加してなかったとしたらこのことは固定観念として今でも持っていたであろうから先入観だけで決めないことが大切で、関わって知ることができてよかったと思っている。だがどちらにも共通していたことは意思表現がはっきりしていることだ。フリーの時間にすることや誘われた時行くか行かないかの判断はすぐ決めて他の人に伝えていた。私は聞かれた時決められずに意思表示をよく曖昧にしているからそこがすごいと感じた。バディと留学生はもちろんそれ以外でも、現地の先生、通った大学近くの料理屋の店員、学食のおばさん、ショッピングモールで働く人など、外国人とコミュニケーションを図ることが素直に楽しかった。本当に交流が出来てよかった。

次に私が驚いた光景を書いていきたいと思う。地下鉄に入った時のことだ。荷物検査があり、警備員による身体検査もあった。正直、適当だったから意味はあるのかと思った。こういったことが日本で無いのは治安が良く、日本人はルールを遵守する意識が強いから、そもそも荷物検査を行う必要性がないからだろう。ゴミ箱がどこでもあることも驚いた。佐賀ではコンビニや駅、ショッピングモールくらいしかゴミ箱が設置されていないため、ゴミ箱を見つけるのに苦労することが多かった。歩いていると、ゴミ箱がすぐあるのでとても便利で不快感を感じなかった。1番驚いたことは日本と大違いの交通ルール事情だった。横断歩道で信号が赤から青に変

わっても素直に渡ってはいけない。車、トラック、バスがガンガン飛ばして信号無視をする。歩道を歩いていても自転車、バイクが歩道を走ってきて、ベルやクラクションを鳴らされたことには日常茶飯事で頭が上がりなかった。常に周りに気を配らなければ無事に歩くことは出来なかった。ドライバーが交通マナーやルールを守らないことには、歩行者も慣れていた。だから少しでも隙間があれば車の間に割り込み、赤信号でも構わず横断する。今や信号や横断歩道はほとんど意味を失ってしまっていた。こういった様々な光景を肌を感じる事が出来たのは貴重な体験だった。

そして中国の文化や習慣はやはり日本と違っていた。モバイル決済が主流の中国ではほとんど現金を持ち歩く人はいなかった。私も生活していた中でモバイル決済しか出来ないものもあったので、みんなが現金の不便さを感じて普及していたことが分かった。また、先で述べたようにゴミ箱がいたるところにあるにもかかわらず、ポイ捨てする人が多かった。バスに乗っていた時、ドアが開いた瞬間にある乗客がゴミを外に投げた光景が今でも目に焼き付いている。食については、辛いものばかりで、私が日本で食べたことがある中華料理と味つけが少し違ったように感じた。でも私は環境にすぐ馴染める方なのであまりにも辛いもの以外は比較的美味しく、物価が安くてお得感を感じた。安いといえば移動運賃も安かった。バスは前払いで2〜3元払うとどこまでも乗ることが出来るし、タクシーは30分くらいで4人あたり17円ですんだ。運賃が低く、すぐにバスとタクシーに会うことができるので日本に比べてとても便利だと思った。このように文化の違いがあったり、環境は決して綺麗とは言えないが、今まで住みにくいと思っていた中国のイメージが180度変わって見えた。

今回のプログラムで得たことは、異国の人や生活に寄り添うということだ。語学力が乏しい私でもジェスチャーや単語を使うことで返答や心情を伝えようとする姿勢と相手を理解しようとする姿勢で向き合えた。一緒に生活する中で、会話をしたり、笑顔でいたり、一緒にいるだけで相手がどんな人なのかわかって楽しい気持ちだった。それが今回出会った人たちに伝わっていたら嬉しいと思う。でも、もっと相手を知るコミュニケーションツールとして英語は重要だと痛感し、英語を勉強する意欲につながっている。日本に戻ってきて、

安心感とともにまた同じような日々が始まるのかと感じた。

非日常を味わうことが出来たことを中国に感謝している。



ドイツ人留学生に勇気を出して話しかけた時の写真

「異なる環境と常識の中での生活」

芸術デザイン学部芸術表現コース

1 年 岩本佳央理

私は今回の浙江科技学院プログラムに参加して、自分から現地に赴き生活し、様々な体験をすることの重要性を改めて強く感じた。

私が留学前に中国に対して抱いていたイメージは日本との政治上の関係や治安の悪さ、大気汚染などの環境の悪さばかりが目につき、あまりいい印象を持っていなかったが、現地で実際に生活し中国人との交流を経て、いくらネットの情報があっても自分の感じ方を変えるには自らが赴くことが大切なのだと感じた。例えば、私は現地で買い物をしたときに英語を使ってくれない中国人の店員に対して初めは反日の感情や他国に対する嫌悪感があるのだと思い込みショックを受けていたが、英語ができる他の中国人の方に通訳をしていた際に、全くの思い過ごしでむしろ日本が好きだと言ってもらえて、それまで抱いていた自分の中の悪い中国の印象をあっさり変えることが出来た。他にも、英語が通じないので授業で覚えた簡単な中国語を使うとすごく喜んでもらえたり笑顔で接すれば必ず笑顔になってくれたり、自分が相手に抱いている感情こそ変える必要があり、それを少しでも変えれば相手への伝わり方も変わることを実感した。

私は中国で生活してみて日本人として戸惑いを感じた中国の常識や習慣がある。特に私が日本との違いを強く感じたのは衛生面について。水の性質が日本と違うことや下水処理が進んでいないところも多いことからトイレ環境や水回りはとても苦勞する点であったように思う。使用した紙を流さずゴミ箱に捨てると必然的に衛生面での問題が発生することや、歯磨きや顔を洗う際など水に対する安心感がないことが生活するうえで困難に感じた。

また清潔さへの配慮の点において、青果販売など食品の販売方法に日本と異なるところを多く発見した。例えば、果物を買いにしかけたときに店の食品が包装されていない状態でまとめて大きな台にのせられているので虫が群がっていたり腐ったものが含まれていたり商品にならないようなものも陳列されていることがあった。これは青果販売だけでなく屋台の商品などにも同様なものが多く、食品の衛生管理には心

配であった。しかし、私の思う衛生管理も日本の常識的な基準であるだけなのではないかと思い、ここでは普通に売買されていることもあり私も購入した果物を食べてみたけれどやはり何の問題もなかったのも、自分の常識にこだわるばかりではなく周りの環境に慣れることや現地の人を見習うことも大切であると感じた。

他にも中国と日本の物価の違いについて、事前研修で中国は物価が安いと聞いていたが、予想よりもはるかに安く驚愕した。バスで近くのショッピングモールに行くまで片道約 60 円で行くことができ、食品、特に青果食品は量り売りのところが多くとても安い値段で購入できた。気になって物価の安さの理由を調べてみたら、安価な労働力で質やサービスを提供し生活費を安く抑えることが出来ているためだと知り、これも発展途上国の内情なのかもしれないと感じた。

しかしそれを踏まえて驚きだったのが、中国の電子マネー化について。買い物をする際、どんなに小さい店にも「アリペイ」という電子マネーのバーコードを必ず見かけた。現金での支払いに全く支障はなかったが他の中国人客はスマートフォンで支払いをする人がほとんどだった。大学の近くにも貸し出し自転車がたくさんあったが、すべてバーコードを読み取るシステムで、電子マネー化がそれほど進んでいない日本での生活と比べて、このような中国の発展にとっても感動した。発展途上国ときいて、確かに発展している部分とまだまだ足りない部分を同時に垣間見ることができたが、その様々な部分から日本も見習うべき点が多くあるように思う。

また、今回の留学において私の主な目的でもあった中国の伝統文化にも多く触れることが出来た。例えば、浙江科技学院の授業プログラムで陶芸や切り絵、書道に絵画などの伝統芸能を自ら体験することができ日本と同じような書道や絵画にも全く違う描き方や手法があることを理解するいい機会となった。私はこれまで日本の伝統芸能は中国から伝来したものが多いため似ている点が多く、特に欧州の外国人には日本と中国は何かと判別がつかないと思われがちなのではないかと感じることや、私自身も陶器や建造物の装飾など近しいものが多く、見ただけでは判別はつかないものだと思っていたが、実際に中国の街を歩いてみたり授業で中国人の先生から伝統芸能を教わってみたりすると細かな違いしかないと思いついていたものが実は大きな技術の違いや文化の違いがある

と学ぶことが出来た。他にも歴史的建造物や街並み、博物館などを巡る機会が多く、中国ならではの歴史や文化を踏まえてこそ人々の思想や感性が生まれているということを改めて深く考えさせられた。このことはこれまで私が感じてきた中国の国民性や地域性にも関わりがあると考え、中国という国について少しでも理解を深められたのではないかなと思う。

最後に、今回中国で二週間生活してみて、いろんな人や場所に実際触れて知らなかったことがまだまだたくさんあると感じた。また、これまでの狭かった視野を広げることができ中国に関する固定概念を大きく変えることが出来たと思う。日本と違う習慣や環境、日本人でない国民性の人々に囲まれることによって考えさせられる部分も多かった。しかし、少しでも相手と関わることで様々な面においてよりお互いを理解できるきっかけを作ることができたので、これからの自分の将来にも大きく影響するいい経験になったと思う。



日本よりも軒端の反り上がりが大きい中国歴史的建造物

「プログラムに参加して良かったこと」

芸術地域デザイン学部地域デザインコース

1年 上角佳代

私は浙江科技大学プログラムに参加して、良かったことや分かったことは、3つある。1つ目は、メディア媒体だけではわからなかったことや知ることのできなかったことを自分の目で確かめることができたことである。最近、メディア媒体の発達により海外に行かずとも多くの様々な外の情報を知り、取得することができる。しかし、メディアの与える情報だけではわからないことは多々ある。また、メディアの情報だけだと中国に対して偏見を持ってしまうひともいる。私は今回のプログラムを通して、メディアだけではわからない情報を自らの目で見ることができたと同時に、中国に対するイメージを改めることができた。例えば、私が浙江にいたときに何度か行った中華料理店では、私たちが日本人留学生だとわかると翻訳アプリを使っておすすめの料理やそれがどれくらい辛いのかなどを教えてくれた。また、一緒に店に行った辛い食べ物が苦手な子には辛さを軽減する飲み物をサービスで出してくれた（その後、苦手ではない人たちにも出してくれた）。浙江を離れる日には英語や翻訳アプリを使いながらお話しし、一緒に写真を撮ったりした。このようなことは、実際に行ってみないとわからないことであると思う。私はこの経験を通して、中国にも日本について知りたいと思っている、日本に興味を持っている人もいるのだなと中国人に対してのあまり良くなかったイメージが変わった。

2つ目は、留学中行動を共にしたドイツ人留学生たちと交流ができたことである。中国に留学すると中国の文化に触れ、中国人との交流があるのは当たり前だと思う。しかし、中国にいながら、中国だけでなくドイツの文化を知り、ドイツ人との交流ができたことは今回のプログラムに参加して本当に良かったと思う。また、異国の人々と交流することで自分たちの文化を見つめなおす機会にもなった。例えば、ドイツ人留学生たちと一緒に麺を食べたとき、自分達がある程度完食した時にはドイツ人たちはまだ半分ほどしか食べておらずなぜだろうと考えていると、ドイツ人には麺をすすることが難しいのだと言われた。この時、私は初めて麺をすするという行為が日本の文化の一つであるということだとわかつ

た。また、写真加工アプリをドイツ人留学生たちにおすすめすると、とても興味を持ってくれ楽しんで写真を撮っていた。このようなアプリも日本の文化の一つであると改めてわかった。個人的なことだがドイツ人留学生に英語で質問した時、聞き返されることなく答えが返ってきてスムーズに会話ができることは非常にうれしかった。このような経験を通して、私は自身の英会話能力やコミュニケーション能力が向上したのではないと思う。また、ヨーロッパ系の外国人に対してある程度の耐性がついたと思う。

3つ目は、国関係なく様々な性格の人がいるということである。日本人は落ち着いているというようにその国のひとに対してのイメージは誰しもが持っていると思う。しかし、みんながみんなそうではないということが今回の留学を通して分かった。例えば、私がよく関わっていたドイツ人留学生たちはドイツ人たちよりも私たちという方を好んでいるように感じた。そのような人たちがいる一方で、毎晩ビールを飲んでミニパーティーをしているドイツ人たちもいた。このような光景を見て私は、ドイツ人だから、日本人だからこのような性格だと決めつけてはいけないなと思った。

私は今回初めて外国へ行った。日本とは異なる文化や私たち日本人の考え方とは違う考えを持つ人々と交流することができた。このような経験は海外へ自らが行かない限り経験することはできないと思う。今回のプログラムに参加してよかったと改めて思う。

以上のことが、私が浙江科技大学プログラムに参加して、良かったことや分かったことである。



浙江の中華料理店（店内）

「中国に行ってみて意外だったこと」

芸術地域デザイン学部地域デザインコース

1年 高森渚

私は浙江科技学院大学プログラムに参加して、今までに持っていた中華人民共和国という国への印象ががらりと変わった。このプログラムに参加する以前は、家族が中国に対しよくないイメージを持っていたためか、中国人は利己的で他人を思いやる気持ちに欠けているという先入観があった。しかし中国文化を美しいと感じる私はこの先入観に疑問を持ち、自分の目で実際に中国社会を見てみたいと思っていた。また、急激な人口減少が懸念されている中国だが、未だ中国からの日本経済への影響は大きく、日本における中国語の需要は高いため、中国語を少しでも知っているということは将来非常に役に立つと私は考えている。以上の理由から私は今回のプログラムに参加することに決めた。

先ほど述べたように、この2週間で私の中国に対するイメージは大きく変わった。中国の方々はとても優しく、言葉の通じない私たちに身ぶり手振りで何かを伝えようとしてくれたり、スマートフォンの翻訳機能を使って私たちと会話をしてくれた。留学中によく行った小さな中華料理店の店員さんは日本のアニメが好きな方で、一品おまけしてくれたり、食事後に中国に文化について話してくれたりした。反日感情のある人もいると知っていたので日本人と打ち明けるのが怖いと感じることもあったのだが、わたしが現地で出会った人々は全員が笑顔だったことが印象的だ。

また、私は実際に中国を訪れるまで中国はとても発展した、東京のようなところだと思っていた。実際に見てみた中国はどこもかしこも工事中で、道路の端には土が見えていて、野良犬が多く出没しているような場所だった。車の通行は荒く、信号や標識の意味がないようにも思われた。大型ショッピングモールの中にあるユニクロなどの大手企業のスタッフさえも勤務中にスマートフォンを弄っているのを見ることが度々あった。また、トイレに紙を流せないということが留学して一番衝撃を受けたことだった。そんな中国社会の実態を目にして初めて発展と社会が整うことには差があるのだと気づいた。

国が違うので当然だが、日本での常識は中国社会では通用しないようであった。しかし逆をいうと日本にはないことが中国には存在する。はっきり言葉にはできないが、華やかさと活気があるのだ。夜道には毎晩違法屋台が並び、都市警察と追いかっけっこをしていた。観光地の売店にちょっと目をやると、すぐに声をかけられ客引きされる。そういったアウトローな事例や迷惑だと思われがちな行為も元気がなければできないことだと考える。特に若い世代よりも少し歳を召した人々の方が生き生きとしているように見えた。

次に述べることはタイトルとは異なる内容になるが、中国に滞在している間一番交流があったのが、同じプログラムに参加していたドイツ人留学生である。この研修で特に仲良くなったドイツ人カップルがいる。毎晩一緒に夕食を食べに出かけ、休日には三人で遠出したこともあった。彼等という気づいたことは、言葉の壁は案外低いということだった。こちらが言うこともあちらが言うこともよく分からないことが多々あったのだが、その度に言い換えたりジェスチャーで表したりして、言いたいことを伝えるというコミュニケーションの本質を改めて知ることができた。また、英語という言語の使いやすさや利便性を、身を持って体験することができた。中国では英語が通じないことが多かったため、少し英語を話せる人がいたり英語の表記があつたりすると、英語の存在にありがたみを感じずにはいられなかった。

中国に滞在してみてわかったことを一言にまとめるならば、やはり実際に見てみないと分からないということである。根も葉もない噂話ばかりを鵜呑みにせず、自分の目で真実を見極めること。それこそが短期留学の本質だと考える。



中国語授業の休み時間風景

「窮屈な日本」

理工学部機械システム工学科

1年 寺川昂希

私は浙江科技学院プログラムに参加して、今回の留学先である中国という国、中国人に対する考え方が変わり、私がこれからどのような人になりたいかの指針がたった。

この留学プログラムに参加する前は、中国の空は大気汚染で濁っており、道路にはたくさんのゴミが捨てられていて、ブランド品の偽造品がたくさんあり、中国人は無礼で冷たいというような悪いイメージがあり、それに比べて日本は…と考えていた。実際に中国に行き、中国の人とふれあい、どうだったのかというと、広州の空は澄んでいてきれいで、道路のゴミは目立つほどではなく、ブランド品の偽造品はあったものの本物の商品を取り扱っている店もあり、中国人に対して私が抱いていた偏見については、人による、と感じた。

大気汚染は、私たちの留学先が中国でも有数のきれいなところだったため気にならなかったが、上海では喉が痛くなり、空気が汚いことを身にしみて感じた。日本のメディアで放映される汚い中国の空は一部であって全部ではないことが分かった。

中国のゴミ問題については、日本とのシステムの違いが大きいと感じた。まず、屋外のゴミの状況について述べる。

「ゴミを拾う仕事の人がいるから、その人に仕事を与えるために私はゴミを捨てている。」という、中国人が発した衝撃の一言を耳にしたことがある人はいないだろうか。私は初めてこの言葉を耳にしたとき、衝撃を受けた。中国人は何を言っているのか、ゴミはゴミ箱に捨てるのが当たり前じゃないか、と思った。しかし、街の至る所に置かれているゴミ箱、ゴミを拾って歩きお金を稼いでいる人を目にして、中国人がそう考えるのも納得がいく位に、中国、広州では市民の高い意識なしで成り立つ、街をきれいに保つシステムが構築されているなど感じた。日本がある程度きれいに保たれているのは、ゴミはゴミ箱に捨てるべきだ、ゴミをポイ捨てるのはよくない、という意識が日本人の間で共有されていて、それを守らないと冷ややかな目で見られる、だから（面倒だけど）ゴミ箱を見つけるまではゴミを持ち歩くか家まで持って帰ろう、と考える日本人が多いからであると私は思う。それ

ほどに日本は中国に比べてゴミ箱が少ない。次に、KFC, MACなどのファストフード店を例に挙げる。日本では、燃えるゴミ、飲み残し、プラスチック類、などのように分けられていて食後に客が自分で分別して捨てるのが当然である。中国では、日本のようなゴミの分別は見られないどころか、食べた後のゴミはテーブルに放置し店員さんが片付ける方式がとられていた。日本では、国民の意識、善意をあてにして街をきれいに保っているが、中国では国民に多くを求めず、そこで雇用を生み出していることに気づいた。私は、ゴミ箱を探し歩く必要も、ゴミを持ち帰る必要もない中国は楽でいいな、と感じるようになった。

中国人については、人による、この一言に尽きる。まず、私が嫌な思いをした体験をあげると、学食で英語が通じなかったため身振り手振りで注文をしようとしたら、おじさんにあっちいけ、とでも言うように手をふられたこと、並んでいるときに何度も順番を抜かされたこと、などたくさんあった。その一方で、大学近くの中華料理店の店員さんが私たちのために店のメニューを日本語訳してくれたり、おばさんが、バスの乗り場を間違えていた私たちに正しいバス停を教えてくれたりなど、親切な中国人にもたくさん出会った。日本は中国との間に複雑な問題を抱えているが、日本人だからといって目の敵にされることもなく、親切な人が多かった。

この2週間でたくさんの気づきがあったが、私の中での1番大きな気づきは、日本では常に周りからの目を気にしなければならず、自分の意思より周りとの調和を重んじることが求められ、日本はとても窮屈に感じるということだ。中国では、周りの目を気にしてないような人が多く、それぞれがそれぞれの人生を謳歌しており、まるで、周りは何をしているかに興味がないようだった。日本では、何かしたいことがあっても周りの目が気になってできないことが多い。だからといって、私たち日本人が中国人のようにならなければいけないとは思わない。

私は、全体の和を重んじるのも大事だし、時には周りの目を気にせず自分がやりたいことをやる必要があるとも思うので、その両方ができる人間になりたい。



比較的美しい中国の道

「留学を経験して」

農学部応用生物科学科

2年 吉浦亜美

私はもともと留学に興味があり、異国の地に足を踏み入れてみたいという思いからこのプログラムの参加を希望した。また大学で1年間中国語を履修し、もっと中国語を学びたい、実際に本場で使ってみたいという思いがあったため浙江科技学院プログラムを選んだ。さらに、大学に入って中国語を勉強する前までは自分の中国に対するイメージはあまり良くなく、むしろ大気や食べ物、マナーなどの面でむしろ悪いイメージさえ持っていた。このイメージが実際にはどうなんだろうと自分の目で確かめたいとも思っていた。

中国語の授業は自分が知っている知識に上乘せるかたちだと思っていたが、中国でも基礎の部分の授業であったため、中国語の伸びとしてはあまりなかった。しかしもう一度しっかり復習することができたし、新しいフレーズなども学んで、それを実際に街中で使ってみて中国人に理解してもらえたのがとても嬉しかった。中国で生活していて一番驚いたのは、街中のゴミ箱の多さだ。どちらかという中国では何も気にせずにポイ捨てしているようなイメージだったが、真逆であった。少し歩けばすぐにゴミ箱があるので大変便利で、日本でももっと増やしてほしいと思った。中国ならではのターンテーブルは今や昔のものだと思っていたが、中華料理店ではほとんどどこにでもあって、これもやはり大変便利で自分の食べたい料理を自分で簡単に取れるのでより食事を楽しめるなと思った。また中国ではアリペイが発達していて、自転車レンタルやバス、小さな食事处でもスマホひとつで簡単に支払っていたのが印象的だった。

私のもう一つの留学の参加理由として、ドイツ人が多く参加するプログラムということで、是非英語でコミュニケーションを取りたいと思ったからだ。現地では実際にドイツ人と一緒に授業を受けたり観光地を巡ったりした。コミュニケーションは英語で行ったが、向こうはとても流暢で、自分のたった1つ上の年齢の人も自由に使いこなしていた。反対に私は自分の知っている形と単語で話すこと、聴き取ることに精一杯だった。ドイツ人留学生に尋ねたところ、ドイツでは英語の授業は話すことに重点を置いているらしい。日本では受

験のための文法が重要視されているように感じるため、そこに差が出てくるのかもしれないと思った。今回英語でないと通じないような状況にあって、自分の言いたいこと、その中で分からない単語一つ一つを自分の知っている言い回しでなんとか伝えてきたが、言語は使ってこそだなと感じた。日本では英語を使う機会がほぼゼロに等しく、自分が実際にどの位話せるのかが分からなかった。はじめは実際に英語を喋ることさえ緊張したが、ドイツ人とコミュニケーションをとっていくうちに聴いたフレーズを真似して使ったりして、だんだんと喋れるレパートリーが増えていった。外国人が日本語で話しかけてきた時、完璧な文章ではなくてもちゃんと伝わるし、言わんとしていることを汲み取って理解出来ることは多いと思う。そう思って、文法的には間違っている部分もあったと思うが、立ち止まらずに相手にきちんと話しかけることを意識した。

今回の留学では中国語よりも英語を使う機会の方が多かった。しかし自分の話す中国語を現地の人に理解してもらえたり、中国人同士の会話でなんとなく理解出来る部分もあってとても嬉しかったし、中国語を学んできた収穫があったかなと感じる。またドイツ人とはそれぞれの母語では全く通じないが、英語を通してたくさんコミュニケーションを取ることができた。向こうもネイティブではないため、英語使って通じている感覚がより身にしみて感じられ嬉しかった。ほんの2週間の留学だったので語学力が向上したとまではいかないが、異国の地で異国の人と母国語以外の言語でコミュニケーションを取れて自分にとってとてもいい経験が出来たと思う。今回2週間の留学を経て、今後長期留学にも挑戦してみたいなと思った。初めて海外に行ってみて、他言語を使いこなせるようになるためには実際に本場に行ってみたり聴いたり、その土地での習慣に沿って生活したりする環境をつくるのが大切なのではないかと感じたからだ。



最終日前日の夜 中国人チューターの部屋にて

「中国で受けた刺激」

芸術地域デザイン学部地域デザインコース

1年 高田遥香

今回私は中国の浙江科技学院大学のプログラムを選んだ。なぜ中国に留学に行こうと思ったかという、一番は自分に刺激を与えて、少しでも成長したかったからだ。大学生になって、自分の時間ができた時、自分は何をやっているのだろうか、もっと自分のまだ見たことのない世界を体験して、厚みのある人生を送りたいとなんとなくぼんやり思った。しかしそれだけでなく、中国語を学んでみたい、新しい価値観を得たい、中華料理を食べたいという欲があったのも事実だ。

ここから、中国で日本人とドイツ人と2週間の留学生生活を共にする中で、体験したこと、思ったことを書いていきたい。

1つ目は、中国語の授業に関して。中国語の授業はドイツ人と受けるので、全て英語で行われた。時々、英語が聞き取れなかったり、わからない単語があったりして少し苦労したけれど、みんなで助け合ったりして、自分の中で貴重な体験になったので良かった。しかし、時間がなく漢字を学ぶことができなかったのが残念だった。

2つ目は、中国人との交流にて。私の中で中国人は冷たく、あまりいい印象がなかったのだが、日本人より優しいのではないかというぐらいとても優しくかった。英語は通じないことが多かったけれど、逆にそこで現地の方の優しさに触れることができた。ジュースをまけてくれたり、英語は通じないけどジェスチャーで丁寧に教えてくれたり、英語に翻訳してくれたり、お気に入りのジュース屋さんの方が覚えていてくれたりと、慣れない土地で不安を覚える中で、とても心が温かくなった。これから、私も国籍関係なく、その国を思い出した時、その人の顔が思い出せるぐらい、みんなに優しく接していこうと思うことができた。

3つ目は、中国で生活することで感じた文化の違いである。最初に中国に来て思ったことは、同じ形の建物がたくさん連なっているということだ。日本の団地を倍にしたくらいあり、見た目はとても綺麗だったけれど、裏に政治の時代背景をととても感じた。次に、大学の近くの屋台です。私は屋台で餃子を頼んだのだが、いきなり屋台が一斉に無くなって何

事かと思ったら、その屋台は違法で国管理のバトカーが来たので隠れていたということであった。その屋台はまた戻って来てくれてかなり美味しい餃子を食べることができたが、言葉にできないなんとも言えない気持ちになった。最初は、戦争映画を見たかのような恐怖を感じたけど、中国の生活のリアルを間近で見ることができて次第にこういう所もあるのだなと認めることができた。最後は、中国の移動手段だ。中国では自転車をレンタルして乗っている人も見たが、最も多く見たのはモーターバイクのようなものだ。日本のバイクとはちょっと違い、日本の電動自転車のような感じに似ていると思った。しかしバイクのように車道を走るので何か変な感じがした。確かに中国はどこに行くにも日本よりも距離があるし、自転車より適しているのかなと感じた。そういう少しの違いも興味深かった。

4つ目は、ドイツ人との交流である。私たちはこのプログラムで中国の文化以外にもドイツの文化にも触れることができた。拍手の仕方の違いとか、ドイツ人は毎晩晩飲みしたりであるとか、驚きもたくさんあった。英語しか通じなくて言葉の壁を感じたりすることもあったけれど、自分から勇気を出して喋ると、向こうから話題を振ってくれるのでとても嬉しかった。多分完璧に話が通じたわけではないけれど、自分から英語で話しかけるのに少し抵抗が減って、それと同時にもっと喋れるようになるために勉強したいと思った。

今回のプログラムで、少しの成長と多くの課題を見つけることができた。また一番はじめに述べた、刺激や新しい価値観を得ることができたと思う。苦労もあったけど、このプログラムのおかげでみんなに支えられて楽しい思い出を作ることができてよかった。この貴重な体験で感じたことを忘れずに、次に生かしていきたい。



西湖の船にて

「イメージと意識の変化」

経済学部経営学科

3年 砥板文登

私は浙江科技学院のプログラムに参加し、初めて中国に行った。テレビのニュース、友達・知人・家族が言っていた、本当か嘘かわからないような噂、それだけで勝手なイメージを持っていた私にとって、中国はあまり良いイメージではなく行きたいと言えるような国ではなかった。そんな国で今までの人生では経験することがなかったようなことをたくさん経験し、様々なことを学んだ。

ある授業で、日本はこれから ICT や、IoT などたくさん導入して、大きく変わっていくということを学んだ。その時私は、日本も今よりもっと便利な世の中になっていくのかとすごく期待をしていた。しかし、中国に行って驚くべきものを目撃した。中国ではすでに ICT や IoT をたくさん導入しており、キャッシュレス化や、GPS を搭載したシェア自転車など、日本では見かけることのないようなものがたくさんあった。日本は中国よりはるかに進んでいると思っていた。町や、道を見たら、日本の方が綺麗である。しかしシステムを見てみると中国の方が進んでいると感じる場面が多くあった。さらに中国ではいたるところで工事が行われており、道が舗装されたりきれいな建物がたくさん建っていたり、インフラ面もすごく進歩していると感じた。

そんな中国にはとても暖かい人たちがたくさんいた。英語が通じない場面である人はスマホの翻訳機能でやさしく対応してくれたり、ある人は身振り手振りで私たちに伝えようとしてくれた。さらに、夜になると位置が変わるという特殊なバス停で、私たちが間違ったところにいた時、それを見ず知らずの人が正しい場所を優しく教えてくれた。行ってみて今まで持っていたイメージがすごく変わった。

そんな中国で自分の考えや意識が変わるようなことが起きた。ある時、仲良くなった中国人学生が「私はこれからドイツに四年間、留学する」と言っていた。そんなことを一度も思ったことがなかった私はその人の意識の高さや勉強に対する態度に衝撃を受けた。今までの自分の生活を振り返ってみると、私は何も考えずにぼーっとして一日を過ごしたり、やりたいことだけをやってたりしてきていた。何をやってきたの

かと自分の人生の中身の薄さを感じ、私は「これから何をすべきか」、「これからの人生をどうするか」など、今まで考えてこなかった様な事を考えるようになった。そしてこれからの人生は時間を無駄にせずに中身の濃いものにしていこうと思った。

話は変わるが、私が今回のプログラムに参加した目的の一つに「高校、大学で学んできた英語がどのくらい身についているかを知るため」というものがあった。私は今まで受験、資格のために英語を学んできたが、「読み、聞き取り」が主な勉強であった。しかし、私は大切なものを勉強してこなかったと痛感させられた。それは「話す〔スピーキング〕」である。今回のプログラムでは主に英語でコミュニケーションをとった。私はドイツの学生と話す時、相手が何を言っているかはわかってても、言葉がなかなか出てこなくて、ぎこちない会話になっていた。その時、もっとスピーキングをしてくればよかったと思った。それと同時にこれから英語を学習する上で何をすべきかがよく分かった。

この二週間で私が持っていた中国のイメージが大きく変わり、たくさんの人々との出会いで様々なことに対する考え方が大きく変わった。この刺激を忘れずに残りの大学生活を有意義なものにしていきたい。



上海での写真